

# 塾生と低気圧を实体经济験

## いろはつづり

鹿嶋市に、市民手作りの生涯学習団体「かしま灘楽習塾」がある。創立12年目を迎え、千人を超える塾生が文学や音楽、健康など100以上の講座を市まちづくり市民センターで学ぶ。

筆者の講座は「お茶の間の気象教室」。塾生14人のほとんどが60歳以上で女性が半数。4月の「気圧」から始まり、「雲はどうして生まれるか」「大気が不安定とは」「台風の仕事み」へと進み、今月8日は「低気圧」で、温暖・寒冷前線などを学んだ。

授業の日に、翌週に予約した霞ヶ浦のヨット体験の可否を検討した。週間予報では「曇り一時雨」だったが、希望的観測や「大丈夫、私は晴れ女よ」といった声に押され、決行した。

その後、毎日、筆者はテレビとにら

古川 武彦 元気象庁予報課長

めっこ。予報は変わらず、ついに12日の朝が来た。なんと、薄日がこぼれ遠くには小さな青空も。しかし、麻生港に着くと雨がパラパラ。船長からは「雨は問題ないが、これから低気圧の影響で南風が強まるのでヨットは出せない」。タブレットで調べると、数日前に講座で学んだばかりの寒冷前線が近づいていた。予報ピツタリの風とにわか雨だった。

船長に次回の乗船をお願いして下船。近くの喫茶店に席を移して反省会をした。塾生は、湖上を滑るヨットの快感は味わえなかったが、低気圧の实体经济験の機会となった。

筆者は小中学校で、気象の出前授業もしている。コップに注いだ水の表面を一枚のちり紙で覆って逆さにすると、水はこぼれない。空気の重さと気圧を学ぶ実験だ。児童が目輝かせるが、気象の授業は5年生だけで、後は中学で学ぶそうだ。気象とそこに潜む怖さの啓発に、これからも努めたい。